

令和元年十月十日発行

皇學館論叢第五十二卷第五号 抜刷

資料紹介

有吉佐和子・歌舞伎関係資料

—— アメリカ留学時代 ——

半
田
美
永

有吉佐和子・歌舞伎関係資料

—— アメリカ留学時代 ——

半田美永

□ 要 旨

昭和三十四（一九五九）年十一月、「紀ノ川」を書き上げた直後の有吉佐和子は、ロックフェラー財団の招きでアメリカに留学する。留学先は、ニューヨーク市にあるサラ・ローレンス・カレッジであった。演劇研究が目的であり、選んだのは「演劇コース」であった。有吉佐和子は学生時代から歌舞伎研究会に入り、雑誌『演劇界』の懸賞論文にもしばしば応募するなど、演劇の世界に深い関心を寄せていたのである。有吉佐和子のアメリカ留学時代の実態は殆ど知られていない。その一端を知り得る資料として、留学先から寄せられた三編の記事を①②③として紹介す

る。また、併せて、アズマ・カブキの創設者吾妻徳穂に関する資料を④として紹介する。有吉佐和子と吾妻徳穂との関わりについては、本稿の末尾の「解説」で触れることにする。

□ キーワード

有吉佐和子 歌舞伎 アメリカ留学 ドナルド・キーン
吾妻徳穂



①表題「渡米歌舞伎あれこれ」

〔解説〕昭和三十五年三月十七日付『朝日新聞』夕刊(五面)に掲載。当時、コロンビア大学準教授・ドナルド・キーン氏との対談。リードに「日米修好百年を記念してのカブキ渡米は、五月末出発をめざして、いま準備に忙しい。十七日に松尾千土地興行社長が再び渡米して最後の打ち合わせをするが、歌右衛門、勘三郎、松緑というメンバーで、だし物も「勸進帳」「籠釣瓶」「娘道成寺」「仮名手本忠臣蔵」「高尾懺悔」「身替座禪」などを持ってゆくことが大体きまると松竹側ではいつている。／渡米するカブキに対するアメリカ側の期待は大きい。コロンビア大学の準教授ドナルド・キーン氏は、この企ての陰の推進力となった人。サラ・ローレンス大学に留学中の作家有吉佐和子さんと対談してもらった。(ニューヨーク支局発)とある。なお、紙面には両者の対談の場面の他、歌右衛門の「娘道成寺」、勘三郎の師直と松緑の若狭之助の舞台「忠臣蔵」、松緑の「勸進帳」の写真が掲載されている。

*

有吉 歌舞伎の渡米については、キーンさんはアメリカ側の

ブレンだったんでしょ。

キーン ええ。なんにも負わされていないのですけど。

有吉 最初は松尾さん(千土地興行社長)がいらっしやっただけ、苦境に立たされたようだが、口火を切った功績は、やはり松尾さんにあると思うわ。

キーン ロサンゼルス映画館主ドウリットルさんが、松尾さんの話を聞いて、それを雅楽公演で知り合ったカースタインさんに伝えたんです。カブキ公演は商業的に採算が合わず、ヒューロックさんも断つたくらいだから、カースタインさんでなくては、できない。

有吉 それはどういう意味？カースタインさんが、大変情熱的な人ということ？。

キーン そう。雅楽のとき、結局三万ドルの損をしたそうです。有吉 雅楽公演は、去年の秋だったが、大変なヒットでしたってね。

キーン ポストンでは、お天気の良い日でしたが、初日に七、八千人、二日目は一万二千人以上もつめかけ、みんな感激していた。感激しない人も少しはあったが、それは日本人だけだった。(笑い)

「忠臣蔵」はぜひとも

有吉 こちらへ持ってくるのに、経費の問題もあって、人数

が限られるでしょう。「忠臣蔵」は、必ず入れるんでしようか。

キーン カースタインさんは、どうしても入れたいといっています。三年前にアズマ・カブキが来て、踊りや、いろんな芝居のサワリを見せ、おおかたのアメリカ人の好みに合ったのが、受けましたね。しかし、あれには

ガツカリした人が大分あったことも、確かです。こんどは、純粹のものでなければ、前に悪印象を受けた人の先入観を消すことはできないでしょう。

有吉 アズマ・カブキは踊りが主。カブキの宣伝版のようなものだった。そのために、こんど本格カブキの渡米という道が開けたんで、啓発的、先駆的な意味では、一応、成功したと思います。

キーン アズマ・カブキとこんどのカブキとは、はっきり区別させなくてはなりません。初日から重みのあるものを見せなくてはいけない。藤娘や娘道成寺で人寄せしたら「アズマ・カブキと変わらんではないか」ということにもなりかねない。そこで、「忠臣蔵」が出てくる。

日本での伝統的な出し物ですからね。

有吉 どうも、私は「忠臣蔵」はいや。あだ討ちの芝居をアメリカで出すのには、日本人として神経にひっかか

るわ。

キーン 松の廊下の刃傷、判官切腹、城外の三幕だけで、あだ討ちまでは出ないはずなんですがね。

有吉 城外のところは、大勢の役者がいるのに、大丈夫かしら。

キーン 役者の数は別問題です。「忠臣蔵」は、どうみても、

日本の芝居で一番有名なものだと思いますね。映画になっても、いつも当たっているでしょう。あだ討ちにしても、私は別に好きだというわけではないが、あれは日本の芝居の伝統の中の、一番大事な一つだと思います。

有吉 敗戦国というのでひっかかるわ。

キーン 有吉さんの気持ちもよく分かります。しかし、敗戦後、間もなく東京で、「忠臣蔵」の上演が許されたでしょう。私は「忠臣蔵」が一番いいと思うが、他に何か重量感のあるものがありますかね。そう、「妹背山

婦女庭訓」山の段。あれはすばらしい。あれほど演劇的なものはない。しかし、これを出すとすると、日本人は、また、文句をつけるでしょうね。首が川を流れる。日本はヤバン国と思われはしないかしらとね。そんな風に、自分の国のことを心配する必要はないん

じゃあないですか。

切符は売り切れを予想

有吉

キーンさんは、特殊な方でしよう。一般は……。

キーン

もちろん、そうでしょうが、アメリカでカプキを見にゆく人は、みんな特殊な人なのです。しかも、公演はニューヨーク、サンフランシスコといった大都会だけ。アメリカの田舎の人や、G Iなどが、どう思うか、などということは考えなくていいことです。大衆をねらったら、必ず失敗しますよ。大衆は映画でもそうですが、外国語で物を書くのは面白くないという人ばかりですからね。

有吉

日本でも、カプキは大衆的なものとは、いろんな意味で、離れつつあります。でも、アメリカでも、きつとヒットするでしょうね。

キーン

私の想定では、ニューヨークでは、初日前に切符は全部売り切れると思います。売れ行きのことを考えなくてよいのだから、一番いいもの、芸術的にすぐれたものを見せたらいいんじゃないですか。

有吉

カプキの解説本も、こちらで出版されているし、少なくとも演劇に興味を持っている人は、カプキのアウト・ラインはみな知ってますものね。ニューヨークで

の公演予定は三週間だそうです。特殊な人だけで持ちますかね。

キーン

ボストン、フィラデルフィアからも来ますでしょう。

有吉

シカゴではやらないのですか。

キーン

冷房のついた大劇場はないだそうです。

有吉

ニューヨークの公演場所、シティー・センターというのはどのくらい入るのです。

キーン

三千何百人。花道を作るから、客席は幾分減るでしょうね。まわり舞台もつけます。ぼん（盆）をのせたような簡単なやつですが。

有吉

所作板はどうですか。吾妻徳穂さんから借りるといいますね。あれがないとタビはひつかかるし、着物はどろどろになって、踊れません。

キーン

シティー・センターは市営ですので、入料金の最高が三ドル九十セントにおさえられています。

有吉

新聞、劇評家はどうでしょう。

キーン

多分、非常に感激することでしょう。日本にしかない古典芸術で、演技も一流俳優となったら、文句のつけようがないじゃないですか。もちろん、内容も深みのある、どっしりとしたものでないと、いけないでしょうが。

有吉

こんどのカブキの番組は、二種類用意されるんですけどね。ひとつはアメリカ側の注文によるもの、もう一つは、大谷松竹会長まかせのもの。アメリカ側のは先の「忠臣蔵」の中に、キーンさんの好みで所作物として「高尾懺悔」を入れるとか。大変、しめっぽいですね。

キーン

これは私の案で、まだはっきりしていません。大谷さんのは聞くところでは、「勧進帳」と「籠釣瓶」。

有吉

一番、大切なのは役者と演技。その意味で中心となる三人は予想以上のベスト・メンバーでうれしかった。カースタインさん、押しの一手だったらしいのね。柱の三人は決まっても、あとの大勢は……本当に大丈夫でしょうね。ニューヨークの五月公演が延びるというウワサは。

キーン

六月になるという話も出ているようですね。理由は口サンゼルス劇場が、六月二十日まで使えないため。もしも、五月ははじめから三週間ニューヨークでやったら、五月末から、六月二十日まで、どうしたらよいか。それで、ニューヨークのふた開けを五月末か六月はじめにずらしたいというのです。

有吉

具体的な点になりますが、例えばカブキのおもしろい

塗り方などでも、こちらの劇界にどういう風に消化さ

れてゆくか。アズマ・カブキのときでも、洋服のファッションにぬきえもん（抜き衣紋）がとりいれられたというじゃありませんか。

キーン

たしかに相当な影響を与えるでしょう。アズマのとき、婦人雑誌で「カブキ・ピンク」という色を宣伝したのがありましたね。

有吉

話がもどるようですが、せりふが分からず、筋も知らないお客さんが、多いんじゃないですか。

キーン

こんどは、少し変わった方法をとるようです。入り口でトランジスター・ラジオを貸し、このイヤ・ホーンを耳に当てれば、場内放送でセリフの同時英訳が聞こえてくる。

大学ではカブキ展

有吉

ラジオでスーパー・インポーズとは、大変ぜいたくなやり方ですね。まったく筋書きなしでやるのは、危険ですものね。東京で「妹背山」を見た外人が、その筋書きを説明しているのを聞いて吹き出してしまった。大判事と佐高（さだか）とは、昔、恋人同士だったのに、結婚できなかつた。そこで娘と息子だけはいっしょにさせようと話し合ったが、うまくいかない。は

なしのもつれのあげく首を切ってしまったんだ——というんです。とんでもない。二人は初めから仲の悪い同士。

②表題「夕鶴」のことなど——アメリカ通信」

キーン ボクも同感だ。東京歌舞伎座では、五十円か出せば英語のプロが雇えるが、その□（一字不明）までのあら筋ばかりで、今やつているところの説明がない。

有吉 外人は幕が開いてからのことを知りたいんですね。コロンビア大学では、こんどカブキをやられるんですって……。

キーン ええ。大学に二つの図書館がありますが、その一方で、歌舞伎展、もう一方で日米修好百年展をやるはずです。カブキ展には、衣装、くまどり、大、小道具の絵などを並べたいと思います。

有吉 コロンビア大学といえは、歌右衛門に名誉博士号を出すという話が、出ていたそうですが……。

キーン ええ。あるにはありました。でも、ある日本人に話したら、反対しました。日本にはそういう制度がないから誤解される。そう簡単に学位を出したら、コロンビア大学の権威を下げるのではないかって。

（三月五日、ニューヨーク市、日本クラブで）

〔解説〕当時の雑誌『演劇界』の編集長・利倉幸一宛の書簡。『演劇界』昭和三十五年三月号（第十八卷第三号）に掲載された。後に、有吉佐和子は『演劇界』は私にとって育ての親』（演劇出版社30年）演劇出版社、昭和五十四年十月）で、『演劇界』が創立三十年になると聞いて、茫然としています。そもそも私に書いたものが活字になる喜びを教えて下さったのが利倉先生でした。学生時代から三年間も連続して書かして頂いたのです。その時の修行が、小説書きへのウォーミングアップになっていることが、よく分かります。」と記した。以下、紹介本文は同誌一一八頁に掲載、当時の有吉佐和子の半身写真が掲げられている。

*

利倉様

一月二十日、私の誕生日に『夕鶴』綜合版落手いたしました。毎年、綺麗なハッピー・バースデーのカードをお送り頂いているのを思い、感慨にふけるものがありました。有難うございました。

先月、オープニング・リハーサルがあつて、私さまさまな助

言をしたにもかかわらず、その結果はすさまじいものになりました。つうの衣装は、私のキモノで私が着付をしたのですが、子供たちは、ハワイのムームと、支那服です。いわれているニッポン・ブームは、実は東洋ブームだったということが、はつきり分りました。私たちにノルウェーとデンマークの違いがはつきりしないように、彼等には日本と志那の区別がつかないらしいのです。どう説明しても、「それは大したことではない」という考えらしいのです。

ですが、戯曲のユニバーサリティは、やはり大したものだと思います。あまり上手とは言えない演技でしたが、オペザパーはそれぞれ感銘を受けたようです。

本公演は一月二十二日の予定でしたが都合で二月中旬に延期されました。一月は二十七日から二十九日まで大谷冽子さんたちのオペラがあるのですが、あいにく私は二十三日からカナダへ旅行しますので、見る事が出来ません。

お送り頂いた本は、演劇コースの学生全部でアプリシエイトしました。各頁にわたって内容を説明させられるので汗をかいています。

今日までに十七ほどの（ブロードウェイ、ホフ・ブロードウェイ含めて）芝居を見ました。いろいろな感じるところ多かったです。中でも、テネシー・ウィリアムズの『青春の愛し

き小鳥』における、ジラルディン・ペイジの名演には、今も酔い続けます。エリア・カザンの演出に、うあわと思うところがありました。現在、大好評なのは、ヘレン・ケラーの幼児を扱った『奇蹟をする人』で十一才のバツティ・デマークが、大人を喰ってしまつてすごいです。映画の技法がステージに響いているという、アメリカの一つの傾向がよく見られます。

大学ではこんな筈では無かつたと思うほど、勉強に追われています。何しろ個人教授を建前とした大学なので、サボルことが絶対不可能なのです。一週に大体戯曲を三つ読まされます。プレヒトをようやく終つて、二月から待望のフリストファ・フライを始めることになりました。当分、辞書と首つびきです。仕事を持つて来なくて、本当によかつたと思いました。

歌舞伎は春には来るといので、前評判が立っていますが、演劇ユニオンと関係を持たないので、いわゆる桧舞台にかからないのが残念です。女形というものを、私はニューヨークに来て、初めて客観出来るようになっていきます。こちらで女装の男性を売物にしているショーを見ると、日本のゲイ・ボーイなどと違つて本当の芸術に近いものを感じます。

お寒さの折から御自愛下さいませ。

③表題「ブロードウェイで見た歌舞伎」

〔解説〕『芸能』昭和三十五年八月号(第二卷八号)に掲載。戸板康二宛書簡。渡米歌舞伎団の実情と成果、また観客席の反響等が詳しく綴られている。戸板康二は「これは私あての手紙の形式であるが、有吉さんの諒解を得て、ここに発表することを許していただいた次第である。」と記している。「GRAND KABUKI CYUSHINGURA」(ACTOR SHOROKU)の台本表紙、シティーセンター劇場、「壺坂」の舞台、また歌右衛門、河竹登志夫等と並ぶ有吉佐和子の写真等が掲載されている。紹介本文は同誌三十一頁〜三十五頁に掲載。

*

ニューヨークは、おびただしく花の咲いた季節が過ぎ、青葉が空を掩っています。もう日中は盛夏のように暑いのですが、夕方からは急に冷えて春寒むを覚えたりしています。

歌舞伎の初日はこういう中で迎えられました。恰度ブロードウェイの演劇関係者が、プロデューサー側と年金制度をめぐって対立し、ストライキに入った直後で、切符は一週間前に売切れてしまっていたので、入りには関係なかったのですが、普通なら同じ時間に出演するので見る機会のない俳優たちが、カプ

キを見られるとばかりに殺到した観があり、初日に私はクロードット・コルベールやメアリー・マーティン(一番ヒットしている「音楽の音」の主演者)を見かけました。メアリー・マーティンとは幕間に少し話をする機会がありました。が、「勸進帳」の後で「すっかりのぼせていますのよ、凄い迫力だわ」と興奮がそれとわかるような顔つきでした。日本と同じようにここでも外人の中に、いわゆる歌舞伎通なる人々があり、わざとトランジスター・ラジオを使わないで、チョボを批判したりするような類がありますが、この人々の意見は歌舞伎のアメリカ公演に対して、あまり役に立つように思えないので割愛します。かねて先生からお頼まれましたので、私は十五分の幕間(二度ありました)の度にごく普通の、つまり演劇愛好家であっても、カプキには全く白紙の状態である人々の意見を集めてみました。その結果やはり演目の選定が何より大切だということを感じました。プロットがわかってもわからなくても「勸進帳」はやはり人々の心を打ったようです。太刀持ちや義経を「女か」と質問する人も多かったですけれど、そんなことはどうだっということは間違いありません。松竹の方の処理も、こと「勸進帳」に関する限り賢明なものだったといえると思います。劇場も狭い狭いと人はこぼすけれど、役者にいわせると帝劇と同じだそ

うで、私は名古屋の御園座を思い出しました。ブロードウェイにだって、歌舞伎座のようなあんな横の長い舞台はないですから、私は劇場については云々すべきではないと思います。ことにブロードウェイと離れているので、今度のストライキと関係なく劇場が開いているという点でも幸運でした。

さて、問題は、次の二つの演目にあったと思います。いったい「壺坂」や「八ツ橋」は誰のどんな意見で組込まれたのですか。私は理解に苦しみました。お里が沢市にかしずくところは、アメリカ・デモクラシーのためには少し貢献したかもしれませんが、観音さまは心ある人々の失笑を買いましたし、ごくプリミティブな芝居だと理解する人には、勘三郎のクレヴァーナ演技に戸惑ったようですし、大道具やプロットに辟易した人々は、喜劇として谷底を受け取っただけです。——が、とにかくこれは一部の人々を喜ばせたことは事実です。何よりの取柄は後味がよかったです、私のごく女の子らしい感想をつけ加えさせて頂くなら、歌右衛門が凄艶なほど美しく、こんな種類の美しさにニューヨークで出会ったのは、ぞくぞくするような喜びでした。

最後の「籠釣瓶」は哀れを止めました。第一にアパタを理解

出来ないのです。火傷したのだと思った人が大半で、しかしとにかく美女と醜男の対照と気がついていたらしい。トランジスター・ラジオがなかったら、あの動きのない、せりふばかりの愛想づかしは持たなかったのだろうと思います。が、とにかく致命的だったのは、一つのアクトの中で、幾度も定式幕が締ったことで、終ったと思つて帰る人、その幕間に退屈に耐えられず立上る人、と、これは何よりアレンジの仕方でも失敗してしました。益も敷いたのですからもつと手ぎわよくやつたらよかつたと思うのですが、とにかく視界をこう度々(五)シーンをさへぎられたのでは、そんな習慣を持たない観客には耐えられなかつたのは勿論です。しかも最後は四ヶ月ぶりで刀を持つて尋ねてきて、だまして女を斬り殺すというだけなので浮かばれません。いつそ大暴れに暴れて何人も斬り殺すという大立廻りでもやつたらよかつたのですが、八ツ橋と女中一人を斬り殺してそれでオシマイでは唾気なくて帰りがけの人々は狐につままれたようでした。

アメリカ人はお世辞で鎧っている人々ですから、感想を聞けば「ワンダフル」「マーベラス」「エノーマス」としかいいませんが、こちらでもう一押し、二押し、「本当にぞう思ったか」と訊くと、たちまち「最後のは無い方が良かった」「最初のが一番よかつた。そしてそれ一つだけだつた。でも色が美しいか

ら」「ニューヨークの観客は忍耐強くないので、芝居のよさよりも退屈の方がわかりやすいので」といった工合です。大喜利という言葉通り、派手に楽しく打ち上げてほしかったと思います。

翌日、各紙一斉に劇評が出ましたが、そして殆どが好意的なものでしたが、何かぱっとしないという印象は否めません。「勸進帳」の演技と型を称賛することは誰も吝しなかつたのですが、あとの二つは故意にか偶然にか、殆ど黙殺されていたように思います。締切時間があるので劇評家は終わりまで見ないで書いたのだろうという人もありました。

こんな事を私が正直に書くのは、或はいいけない事なのかもしれません。成功・大成功と伝えられているに違いないのですし、私もそれを疑うものではありません。しかし、私は、もっと成功する筈であつたと思っていました。もっと観客を魅了しつくすと思っていました。知人から「あなたこそどう思つたか」と聞き返されて、私は沈痛な表情でこう答えたのです。「I'm not satisfied. Our KABUKI is something much more, すると彼らは、私に心から同情し、Well you expected too much, didn't you?」と言つたものです。が、こんな会話では、それが私は満足できません。演目のチョイスが間違つていたとい

口惜しさは、仮に役者が未熟であつたとしても、それよりも遙かに口惜しいものではなかつたでしょうか。

日本には伝えられていないかもしれませんが、かねて歌舞伎については劇評家は一流の顔ぶれさえ揃えれば決してけなさないからということが云われていました。それはアメリカの演劇人たちが、すでに宣伝しつくした芸術をけなしたら、けなした方が笑ひ者にされるからなのです。アメリカのインテリ達の権威主義は、呆れるほどなので、私はこの話は実によく分かりました。

そして、これらの劇評が、後の芝居を黙殺し、「勸進帳」だけを取り上げたのも、積極的な批判を示さなかつたのも、この意味で実によく理解できました。しかし、観客は、劇評家より正直です。「籠釣瓶」の芝居最中に、約五分の一の観客が帰つてしまつたことを、私は嫌われるのを覚悟で書いて書いておこうと思います。

そして、もう一つ、「ジャーナル・アメリカ」という、右翼系の（しかも三流紙ではありません）新聞が、かなり大胆に、歌舞伎を批判し、「No emotional impacts」と書いていたのもお知らせします。「少しも心を打つものがなかつた」という意味です。

「アメリカ人には分らないのだ」と云うべきではないと思います。演劇の観客というのはニューヨークではかなり知的な人々なのですし、歌舞伎も初日を買う人々などは、その中でも上等の人々なのです。殊に、トランジスター・ラジオによる同時通訳など、至れり尽せりの設備の中で、分らない筈はありません。云えることは、日本でも、東京で、団体客でなく自発的な意志のもとに集った少数の観客に、「壺坂」と「籠釣瓶」をこんな不備なアレンジで見せたら、同じ結果だろうと云うことです。

成功は確かに成功ですが、私には残念さが拭うことも出来ずに残っています。二の替りはそのかわり、ずっと反響がよろしいでしょうと思います。「アメリカ」だからという基準は必要ないのだし、それが間違いのもとだったのです。世界は狭くありませんでしたし、カプキのユニバーサリティは、もつと信ずべきものでした。

初日の成功は、もう一度まとめて申しますと、全体的な意味で「勸進帳」があげられ、「籠釣瓶」の仲之町と茶室のセットは役者の一人もいないときに拍手でした。長谷川の手柄です。そして最後に特筆すべきものは、ドナルド・リッチー氏と渡辺美代子さんのトランジスター・ラジオによる同時通訳の功績で

す。これが、どれほど効果的だったかは、実際に使った人でなければ分らないかもしれません。渡辺さんのは如何にも女性らしい気のつかった優しい解説と翻訳でした。リッチー氏のは、素晴らしい名訳と、役者はだしの名口演で、私は愛想づかしの台詞など英語の方に聞き惚れたくらいです。いい人が見つかったものだと思いますし、歌舞伎の英訳はいくつか読みました。が、彼ほど直截的に掴んだ人はいなかったような気がしました。

「夜毎にわかる枕の数——」など、まさにシエクスピアの抒情がありました。「籠釣瓶は、斬れる、なあ」はたつぷりと、*It Cuts well.* とよかせました。今度の歌舞伎の成功に当たって、この人々の力は数え落してはならないものだと思います。毎日々々マイクを前の、台本と舞台をにらみながら三週間続けるのですから、役者なみの労働なのです。

毎夕八時からの芝居で、日曜は休みですし時間の豊富な日常で、役者さんたちは羽をのばしていますが、各人各様で私には色々面白い発見がありました。中々一人歩きのできない弱虫もいれば、一人で英語も喋れないのにどこへでも出かけて行く人があり、観察しています。先日、私はデートで五番街を急いでいましたら、又五郎さんに出会いました。彼は一人でスマー

トな背広姿で、歩いていたのですが、少しもエトランゼのよう
でなく、自然で、のびのびしていたのが印象的でした。歌舞伎
を担っている人々がニューヨークの五番街に立っていても少し
も不自然でないというのは「時代」ではないでしょうか。私は
まざと（まざまざと）歌舞伎の栄光を見た想いでした。「要す
るに、それほど大変なことではなかったのだ」と私は一人でう
なずいていたのです。一九六四年に、リンカン・センターが出
来上があれば歌舞伎ばかりでなく、日本の芸能がもっと頻繁に招
かれるようになるでしょうが、騒がず、自然に日本と同じ気持
ちでのればいいのだと思うことです。

六月十日、二の替りの歌舞伎を見ました。九日が第二プロの
初日でしたが、私は生憎と他の切符を買ってあって（二ヶ月も
前から）行くことが出来ませんでした。予想通り、二日の初日
より評判がいいようなので、安心したせいもあります。

さて「道成寺」「忠臣蔵」「身替座禪」のこの三幕は、歌右衛
門、松緑、勘三郎の三人の演目として、それぞれ危げのないも
のでしたが、観客の反応がこの堅実な幕々に対しては、こうも
違ふかと思うほど違っていたのには驚かされました。「道成寺」
では女形の美しさ妖しさというものがわかったようでしたし、
多くの人々は、トランジスター・ラジオの解説を終わりがら

は聞かなくなっていました。解説の必要のなさがわかったらし
いのです。多少のアレンジはしてあったせいもあるでしょう
が、誰も退屈しなかったようです。歌右衛門丈も熱演でした。
鐘に上つてからの凄絶な表情には息を吞まされましたし、それ
までとがらりと変つて化粧の顔になったことを指摘して、幕間
には興奮していた人々がいました。「忠臣蔵」は大序には又五
郎の桃井が、キメ、キメのわかりやすさを出していたので助
かったようですし、私も実に今回は立派な演劇なのだと思います
りました。戯曲そのものがまず何よりよく出来ているのだと思
います。観客は充分それに吸収されていました。シーン毎に定
式幕が引かれましたが、その瞬間のドラマの余韻を味わうこと
に熱心な観客は、その幕間の退屈は全く覚えなかったのです。
「籠釣瓶」で、私はアレンジの仕方に難があると申しましたが、
実はもつと本質的な問題であったということがわかりました。
「忠臣蔵」は何より勝れた演劇であったのです。お軽勘平の件
はカットした上の部で、城の外の由良之助まででしたが、判官
の切腹はセレモニーの雰囲気観客はすっかり浸って緊張して
しまいました。地味な思い入ればかりの由良之助の芝居にも、
完全に従うことが出来たようです。松緑へのアンコールは凄
いものでした。それに応えて由良之助の沈痛な面持を崩さずに一
輯していた松緑はまことに立派でした。芝居通めいた言い方を

一行だけ許して頂けますなら、この日の顔世（歌）〈顔世御前の歌のこと〉は、私の見た顔世の中で最高でした。結構な出来だったと言えると幸いです。

「身替座禪」は、もう勘三郎が舞台上に現われるなり拍手で、徹頭徹尾エンジョイしたと言えます。賢明な演目のチョイスでした。恐妻がアメリカ人に受けたというより、「身替座禪」そのものが受け入れられたのだと言うべきだと思います。松羽目の、狂言もののユニバーサリティだったと思うのです。

この夜、私は熱狂して拍手をしている観客の間を縫って劇場の外に出ながら「かけねなしの成功」を感じていました。同じ日本人として誇らかな気持ちでした。キモノを着ているのが実際にいい気持ちでした。

ニューヨーク・タイムズの劇評は文字通りベタ褒めでした。グランド・カブキのグランドの小さいものがあつたといい、松緑の由良之助、勘三郎の判官を激賞してありました。

成功でした。大成功でした。

そしてその成功の鍵は、外人を対象として行なわれたチョイスではなかったということだと思います。正直に言って、私はこれほど充実したプログラムは日本でも見なかったように思います。不勉強な不満な（舞台は）、一幕もなく三つを三つともそれぞれエンジョイできて、私は私自身でも大変に興奮してい

たのです。久々で舞台上に酔いました。「日本人がこれだけ感動したのですから、アメリカ人にわからなかった筈はないのだ」と、私は幾度もつぶやいていました。どこにも難のない成果だったのです。この日、劇場に来た日本人はみんな満足して帰りました。ですからこの日、劇場に来たアメリカ人は、みんな大そう興奮して帰ったのです。第一プログラムのときの反応とは大違いでした。それは二つの劇評を比較してもよくわかります。今度は劇評家が興奮して筆をとっているのがわかるのです。

大成功でした。

その日から私のところにアメリカ人の友だちが、ジャンジャン電話をかけてきます。みんな、きかれなくても感想がいろいろいいのです。私は、微笑しながら応対しています。

④ 「吾妻徳穂よどこへ行く」

〔解説〕『日本』昭和三十四年六月号（第二巻第六号）に掲載された。リードに「舞踊界の異端児といわれながらも四回にわたる「アズマカブキ」の海外公演を敢行し、今度はアメリカ人を住を決意した吾妻徳穂——この革命児の生活をつぶさにみた筆者の描く人間徳穂の横顔」とある。紹介本文は、同誌一三三頁

く一三五頁に掲載。一三四頁に「時雨西行」を踊る徳穂の写真が掲載されている。なお、ここに書かれた二人の関係は、吾妻徳穂「踊って躍って八十年——想い出の交遊記——」（読売新聞社、昭和六十三年十一月）収録の「有吉佐和子さんのこと」によって補充することができる。

*

去る三月十五日付の東京中日新聞に、「雷」という匿名氏が、「吾妻徳穂を送る」と題して、こんな一文を寄せていた。これから私が書きたいことを、それに添って綴ろうと思うので、ここにその全文を転載して、私の序文に代えさせて頂く。

《吾妻徳穂さん。とうとうアメリカへ行ってしまわれるのですね。今度の渡米は、アメリカで市民権を得て、永久に居住するためだとか。もう日本では、二度とあなたの舞姿に接することはできないのでしょうか。ほんとうにさびしいことだと思えます。／日本のりっぱな古美術がボストンへ行かなければ見られないように、徳穂という無形文化財にもアメリカへ行かないと接することができないのです。／名人藤間政弥にたたきこまれたあなたの芸は、あなたぐらいの年配の舞踊家には見られない背骨が、ピンと一本通っていました。いわばデッサンのある舞踊だったのです。あなたはそれに肉をつけて、女性の舞を作りました。カブキという男の芸の影響から舞踊を解放したので

す。これは誰かがやらなければならない古典と現代とをつなぐための大問題だったのです。それをあなたはやりとげた。この功績は舞踊史上に特筆されることでしょう。／かなしいことに日本ではあなたのデッサンのある芸をほんとうに理解する力が、もうなくなってしまった。しかし、デッサンのある芸は、世界のどこへ行っても認められるものです。アズマカブキに拍手を送ったアメリカの社会は、さすがに芸術の世界的視野に立っていたと感心します。／あなたはもう日本の舞踊界に何の未練もない。そこは芸よりもハツタリやオモイツキだけが通用する世界です。あなたがやりとげたような改革や、外国であなたが示した芸術の受けとられ方に対する世界的視野に立った評価などは、そこには少しもないのです。オセジ、ヒクツ、ヨウリヨウ、そういった軽蔑すべき悪徳だけが、かっさいをもって受け入れられるところなのです。／吾妻徳穂さん。あなたは良い潮時に日本を見かぎりました。どうかアメリカへ行つて、あなたの芸術を、あるがままの姿で評価して受け入れてくれる人たちの間で、幸福な余生を送ってください。ホームシックが起つても、日本人があなたにあなたたの迫害の数かずを思い出して、たえしのんで下さい。／永久のさようならをいわせて下さい。永久に、さようなら。《雷》

この一文を読んだ夜、私は久々に吾妻徳穂に電話をかけた。

もちろん、彼女がまだ知らなければ、電話口で読み上げてあげようと思っただからだ。

「読んだ、読んだ。私も今読んだところだったよ」

「そうですか。よかったですねえ。見ている人は見ている、分る人には分かっていたことなんだって、私はつくづく思いましたよ」

「本当だ、日本人もバカばかりじゃないねえ。久しぶりで胸が晴れた。だけど、この雷って誰だろう。有吉さんは思い当たらない？」

「さあ、誰なんでしょうねえ。経緯がすっかり分って、これだけズバリと云えるのは」

吾妻女史にも私にも皆目見当がつかなかった。その気で調べれば新聞の匿名子の覆面など簡単にはげるものだと知っていたから、

「誰かに頼んで調べてもらおうか」

「そうですね、これで日本とお別れなんだから会ってお礼を云つても情実にはならないでしょう」

それだけでその話は終り、後は例によつて彼女がこれから始める新しい生活への設計図が着々進捗しているということを大声で私に喋り出した。それはお世辞にも美声と云えない声であったが、受話器を耳に当てて適当な相槌を打ちながら、私は

珍しく感傷にとりつかれていた。

「どしたのオ、有吉さん。あんた元気がないねエ」

「そんなわけじゃないんですけどネ、この新聞見たり、そんな話を聞くにつけても、ああ苦労したなあと思ひ出してたんです」急に女史の声も湿って

「そうだよオ、あんたにも随分親身になつてもらつた。だけど、もうあんな苦労はご免だ。徳穂は羽をのばして飛んで行くんだから、あんたも喜んで頂だいよ！」

無理やり勢のいい言葉でしめくくつた。

人づかいの荒い女史

こんな会話を例に出しても分るように、吾妻徳穂女史と私の繋りは、殆ど肉親のそのように強いものである。そもそもは、第二回アヅマカブキの前後約一年半の間、私が女史の秘書をしていたという関係から生れたものだが、女史のむやみと荒い人づかいと、奉公人としては齒ごたえのありすぎた私と、幾度も火花を散らしたり、憎みあつたり、ともかく二人して激しい時間を共に持ったということが、私たちの今日の絆を鍛えたのである。

私たち——という言い方を私がしては不遜かもしれない。吾妻徳穂は当年五十歳で、私はまだ三十に手の届かない若さの至らなさである。が、それにもかかわらず、彼女は私が言う言葉

に耳を傾け、あるときは差出した指示にも従ってくれた。「あたしはガクがないからね。あんたはインテリさんだから、私より利口にきまつてる。だから話はきくんだよ」

こう割り切つて、アウテリ（インテリのインをモジつたか）の私を苦笑させるかと思えば、機嫌の変わりやすい性格だから、俄かに雲行きがあやしくなつて

「何言つてんだい、あたしだつて無駄に齡はとつてないよ。踊ればお前さんより上手いんだ！」と痲癩を起した。お前さんと呼ばれた私は生れて一度も日本舞踊を習つたことがないのだから、踊りが吾妻徳穂より下手なのは当り前の話である。こんな子供の様な啖呵を大真面目で切るのが、大芸術家なのだから、私には面白くて仕方がなかつた。

個人的には秘書となつて以来今日まで五年そこそここのつきあいだけでも、私が始めて吾妻徳穂の存在を知つたのは、もうかれこれ十年ばかり昔のことになる。たしか藤間寿枝さんの引退披露で、劇場は新橋演舞場だった。今は亡き夫君藤間万三哉と二人で舞つた「時雨西行」——能の「江口」から材を取つた舞踊で、清元が名曲でありすぎて良い振りが仲々つかず、踊り手のもてあましになつていた曲目だとは後できき、徳穂が万三哉と姦通罪に問われて後、再出発するときこれを夫妻して創りあげたといういわくのある作品だと、これも後できいた——そ

のときの舞台姿は私の目に今でもありありと残っている。江口の里で時雨に悩まされて遊女の家にも宿りした西行法師が、その遊女の舞姿から日頃信仰している普賢菩薩の御姿を発見するという筋であつたが、江口の遊君を□（一字不明）踊りで舞う吾妻徳穂の姿は、この世のなかにそんな尊いものがあるのかと私を愕然とさせるほど美しく気高かつた。菩薩位にある芸術家を私は自分の眼でみたと思つた。

私が日本舞踊ばかりでなく、日本の伝統演劇に興味を持ち始めたのは、これが契機となつたようである。それまでの私は、平凡な銀行員の娘で、両親は大正から昭和初期のいわゆるモボとモガ（モダンボーイとモダンガールの意）であり、家の中には古い日本の陰影など何処にも見られないという生活環境だったのだ。数年後、偶然から吾妻女史に招かれて秘書に落着いたのは、その最初から考えれば因縁浅からぬものがあつたと言えるかもしれない。

ところで、「時雨西行」の高貴な舞姿から想像していた吾妻徳穂は、私の期待を悉く裏切つてしまふのに旬日を要しなかつた。ブロードウェイの脚光を浴びたマダム吾妻は、思いがけぬ赤字に消沈して帰つて来たところが、日本では思いがけぬ称賛を得て、一躍大芸術家に扱われ、完全に慢心しているところなのであつた。チューインガムを噛み、長襦袢のように派手な着

物を着て、耳をふさぎたいようなひどい片言の英語を操る。

「さあ、ビジネスだよ。何処と何処に電話をかけて、先生は今日は御在宅ですから来るようにと言つとくれ！」

いきなりハッパをかけられて、どきまぎしている私の耳に、「お前さん、それでも大学を出たのかい。一度言われて分らないのか。あたしや小学校もろくすっぽ行つてないんだよ？」

毒舌というより横ッ面を張るような気合であった。

今になって振り返つても、私にはその頃の思い出が清々しい。理屈とか主義主張が何より大切なインテリのインテリ臭さを、私は彼女のもとですっかり洗い落すことができたからである。

私は彼女の許で、行動の精神を学んだ。自分の仕事に対する烈々とした気迫と、そのために全霊をあげて悔いない女性像を、私はこの目で見てしまったのだ。

彼女の言うこと、すること、命じることの殆どは、理にかなつていなかつたけれども、私がある非を糺す前に、彼女の言いたいこと、したいこと、望んでいることを察知しようと勤めたのも、私自身に彼女の本质から学ぼうとする気があつたことと了せたのかもしれない。

あれだけの名人芸を持つひとが、ステージのある前夜、それも深更に俄かに目覚めて、

「あ！明日の道成寺、踊れるかしら、心配になつてきた。有吉さん、テープ、テープ」と、隣に寝ている私を叩き起すのである。

テープレコーダーを廻して、気になる件りを寝巻のまままで一通り踊つてから、

「ああ踊れた！」

そう云うと、もうベッドに飛び込んで、ガーツと眠つてしまふ。

寝付きの悪い私は、幾度こんなめにあわされて苦しんだことだつただろう。秘書が、こんなにもこき使われるものだとは知らなかつた。私は殆ど家に帰してもらえず、彼女の活動中終始同じように緊張していなければならなかつたので、小説の方がそろそろ芽を吹き出しそうだったので、何を書く暇もない忙しさだつたのである。しかし、そのかわり私は一年間というものを完全に吾妻徳穂と共に生きたように思える。その間、有吉佐和子という人間はいなかつたのだから。

暗号文の日記

第二回のアズマカブキとヒューロック・カンパニーとの契約もひどいものだつた。女人の興行師ならば手の出せぬような、こちら側には不利な条件が並んでいた。衣裳・かつら・楽器等の仕込み費用は、贅沢なものを揃えたいという彼女の一步も退

かぬ希望の強さに、費用はかさむ一方で、そんな世界には素人の私でもハラハラするような出立準備だった。

お金を集める、踊りの稽古、挨拶まわり、出立間際まで出演者交渉に歩き、その間日本に残す弟子たちのことも考えねばならない。最初の約束では、第二回アズマカブキ出立までの手伝いということであったのに、出発を一週間前に控えて、

「有吉さん、後事の一切はあなたに任せます。いいね、頼んだよ！」

ウムを云わさぬ裂帛の気合である。その勢いで、月給も半額にする旨云い渡された。責任が重くなるのに、支払いを減らすという心理は私には解せなかつたが、それを黙って引受けたのだから私の方もいい加減なものだ。

かくて十ヶ月、一行三十名が飛び立ってしまった後には不義理して払い残した借金が、あちこちから出てきて、私はその返済方法も分らず途方に暮れた。とにかく稽古所の弟子を減らさぬように、代稽古の名取たちに一生懸命やつてもらって、それから後援者の家を廻って頭を下げ、いくらかのお金を融通してもらったが、こんなことは始めてだったから夢中で、今思い出してもどうしてやりぬけたのだらうと思うくらいだ。

師匠関係でもなく、封建主従関係でもなく、いわば一期半期の奉公人にすぎない私が、なんでこんな苦勞をしなければなら

ないのかと、腕を組んで考えこむこともあったが、そんな私を追いまわすように、徳穂女史からの手紙が頻々と舞い込み、ヤレカンザシを送れ、足駄を送れ、誰のところへ行って何を伝えろと命令しきりである。その上彼女の「日記」なるもの、これが毎日々々送られてくる。その清書に私は一番大きな悲鳴をあげたものだ。ことごとく、これ暗号文のような日記なのであった。第一に文字が読みにくい、ようやく読んでも誤字と脱字ばかり、それをやつと埋めて、今度は意味が分からない。分かるのは彼女が団員の誰彼とアツレキをかもし、怒りたいのだが怒れば旅先でどんな返報をされるか分からないので、やむなくその怒りを私に宛てた日記の中に叩きつけている——ということだけであった。

気性の烈しい彼女だった。およそ、我慢というものには二種類あって、しても何の役にも立たぬ我慢は絶対にする必要がないという生き方をしてきた彼女の半生である。その中で、する必要のない我慢をし続けたのは、おそらくこの十ヶ月間だったかと思う。いつもはどんな苦しいときにも彼女は愛する人と一緒にいることで耐えぬいてきた。それが、この期間で、夫であった藤間万三哉との決定的な溝を深めてしまったのである。吾妻徳穂が、男を愛することを失って、ただ踊りだけで生き抜いた月日であった。

再度好評を博して全米巡業を終えて帰国した彼女を、羽田空港に迎えたとき、

「有吉さん……」抱きついて、彼女はぼろぼろと涙を流した。

「先生……」私も一瞬、声をのんで抱きしめていた。十ヶ月間で、彼女の首も肩も、驚くほど痩せていた。

三日後、吾妻徳穂と私の二人は、総ての人々に所在を知らせず、伊豆の旅館の離れで二人きりで向いあつて来た。ともかく静養をさせなければならぬ、と私は思つて来た。彼女からは想像以上に殺伐たるものが感じられたのだ。今度は大丈夫だと思つて来たのに、概算して八百万円ほどの借金が残つてしまつたのだ。第一回分と併せて、千二百万円余……。赤字の打撃に加えて、万三哉との離婚を考えていた彼女は、立上る気力はないようなものだった。

「もう踊りはやめたよ……」そう云つた彼女の、暗い、死んだような眼つきを、その前にも後にも私は見たことがない。私は慄然としていたが、糸の切れた操り人形のように目の前に力なく坐っている彼女を、そのまま見守るには私は年齢的にも包容力が足りなかつた。

「踊りをやめて、それで何をやるうつていうんです」

皮肉るような、オチヨクするような口調に、彼女は険しい目をあげて、

「お前さんと違つて私は台所仕事は一人前以上にできるんだからね。家政婦になつたつて、自分一人は食べていけるんだ」

「へへえ、家政婦になりますか」

私はブツと嘔き出した。彼女も私の目を見て、ようやく苦笑した。なんとかして、暗がりから立上つてほしいと云つている私の気持ちを通じたのだつた。

過去の名声のために

「あの伊豆での三日間を思い出すねえ」

この正月も私たちは二人きりで箱根で元日の夜を迎えたのだつたが、そのとき徳穂女史はしみじみと云つたものだ。

「あの三日間、あんたのように憎い人間がいるかと思うようだつたよ。弱つてる私を慰めるどころか怒らしてばかりいたんだもの」

「そうでもしなきゃ自殺しちまうんじゃないかって、心配でたまらなかつたんですもの。私は思い出しでもぞつとしますよ」

「そうだつた。まっ暗だつたからねえ」

世間は、ただ豪勢な彼女の仕事ぶりしか見ていないけれど、私は彼女の暗い谷間を、この他にも三度ばかりのぞいている。気の強い、思うことは何でもやり遂げる人だと世間は見ていて、私の見る限りでは彼女ほど思惑外れで世の中を渡つてきている人はないような気がする。が、思惑が外れたとき、そこで

居直つてみせるのが、彼女の場合は演技よりも必死の信仰に近く、それが吾妻徳穂の今日を築いたのだとも、私は思う。

「金は儲からなかった。借金は山とできた。だけど吾妻徳穂の名は世界的になった。この名声を無駄にしたら、もう私の余生はない」

それが、今度の渡米なのだ。

日本の舞踊界は、他の世界では想像することも出来ないほど生きにくいところだ。その限られた世界の人々よってのみ支えられている芸術だから、作品も狭いし、それを作っている人々の心も狭い。彼女のように市村羽左衛門と藤間雪後という両親に守られて、派手にデビューした舞踊家でさえ、その才能にもかかわらず「いやなおもい」はもういやだというほどし尽してきた。この経緯は冒頭に〈記〉した「雷」氏の言う通りである。だが、これは決して彼女自身の口から出た言葉ではないが、日本を見限ったとするなら、それは今度の渡米ではない。第一回のアズマカブキが、すでに日本の舞踊界に見切りをつけた行動だったのだ。

経理の方にはうといけれども、彼女ほど金欲物欲の旺盛な人を私は他に知らない。が、それが経理にうといものだから、毎度思惑外れになるのだった。アズマカブキにしても、踊りが興行にならない日本に、彼女がつくづく詰まらなくなって飛出し

て行った形なのだ。その証拠には、三月二十六日の壮行会で、

「五十になるまで踊り続けて、それで興行にならない筈がないと思っただです。それで、興行のできる国があるから私は行く」としているのです。アメリカは、日本のように芸術家の私生活に立ち入ることはしないし、意地悪く足をひっぱる者もいない。何の色眼がねもかけずに、作品を見て、買えるものなら買ってくれるところです。だから私は出かけるのです」

彼女はこう言明している。行って帰ってくるから、人件費や旅費がかさむから赤字になったアズマカブキなのだ。それなら永住権を得て、単身渡米して腰をすえてかかれば、誰にも迷惑をかけずに暮らすことができるのではないか——という計算なのだ。

アメリカへ行って何を、どうやるつもりなのか。具体策を誰にも明かさないう彼女だ。私も徒にそれを憶測するのは慎もうと思う。ただ、壮行会で年来の友人である今日出海氏が、

「まあ行っておいでなさい。そして、いつでも帰っていらっしやい」

と滋味ある言葉を贈られたのを、私も秘かに彼女を送る言葉としたい。

今度また思惑が外れたら、どうするのか。そのときの暗い谷間に、かけおいて彼女を抱きしめることのできる身近な人が、

アメリカにいるのかどうか——私には不安でならないけれども、またその後で起ち上る吾妻徳穂を信じ、予想外の経済的な成功と平和な老後が、必ず彼女を訪れるように祈つてやまない。

*

解説——有吉佐和子と歌舞伎、そして吾妻徳穂のこと

有吉佐和子年譜には、出生（昭和六年一月二十日）から、昭和二十四年（十八歳）の項目までが欠落していた。奥野健男氏が「最近の新潮社刊の有吉佐和子集の年譜に、年次はわけていないが、二十四年までの生い立ちがはじめて書かれている」（『有吉佐和子—エトランジェの目』『日本の文学』75、中央公論社、昭和四十四年二月、五二六頁）と記している通りである。「最近の新潮社刊の有吉佐和子集」とは『新潮日本文学57 有吉佐和子集』（昭和四十三年十一月、初版発行）のことである。著者自らが「加筆、訂正」を加えたと注記のあるこの「年譜」の「昭和三十四年（一九五九・二十八歳）の項目には次のようにある。

《一月、本格的年代記ものの最初の作品「紀ノ川」を『婦人画報』（五月完結）に連載し、これによって文壇的地位を確立した。二月、「祈禱」を『文学界』に発表。六月、菊五郎劇団のため「石の庭」を執筆、歌舞伎座で上演。八月、最初の新聞小

説「私は忘れない」を『朝日新聞』夕刊（十二月完結）に連載。十一月、ロックフェラー財団の招きにより、ニューヨークに留学、サラ・ローレンス・カレッジに学んだ。翌年八月、アメリカを発ち、ヨーロッパ十一カ国を巡つて十一月十六日帰国。この間約一年、執筆はほとんどしなかった。》

本稿に紹介した資料①②③は、ここに「ニューヨークに留学、サラ・ローレンス・カレッジに学んだ」と記述される当時のものである。先般発行された『有吉佐和子の世界』（翰林書房、平成十六年十月）収録の「年譜」には、それらのタイトルが紹介されているが、内容については不詳である。その内容を通覧することによって、当時のアメリカでのカブキの現状と、それに対する有吉佐和子の関心の度合いが窺われて興味深い。また④の吾妻徳穂との関わりについては、同じく、新潮社版の「年譜」に「二十九年（二十三歳）七月より三十一年五月まで舞踏家吾妻徳穂の渡米中、アズマカブキ委員会のコレスポンデントとして秘書の役目もはたし、渡米中の事務連絡にあたり、演出なども手伝った。」（七二七頁）と記されている。

吾妻徳穂著『踊って躍って八十年——想い出の交遊記——』（読売新聞社、昭和六十三年十一月）の「有吉佐和子さんのこと」に「私より年下だったけれど、あの人は私にとつての薬、でした。私に非があるとき、ずけつと言ってくれる人でした。」

(二二七頁)とある。また、二人の出会いについては、「知人だったロン・バリーというイタリアの方から、内村直也さんを通じて知っている有能なお嬢さんがいるから一度会ってみては、とお話があり、宅へお越し願って初めてお会いしたのが、まだ大学を出て間もなくの有吉佐和子さんでした。／おカツパのような髪型で、当時としては、かなり背の高いお嬢さんでした。」(同書、一〇七頁)と回想されている。

第一回アズマカブキを終え、吾妻徳穂がアメリカから帰国したのが昭和二十九年六月、翌昭和三十年再び渡米を控えた彼女が、その留守宅を預けたのが有吉佐和子だった。有吉佐和子は、知られるように学生時代から「歌舞伎研究会」に所属し、『演劇界』に出入りして、当時の編集長・利倉幸一の許でインタビュー記事などを手掛けていたのであった。また、有吉佐和子は、吾妻徳穂の演じる「時雨西行」の遊女を観て感銘を受けていたのであった。出会うべくして出会った二人であったと言うべきかも知れない。

昭和五十九年(一九八四)八月三十日、有吉佐和子は、急性心不全のため自宅で亡くなった。彼女の母・秋津に頼まれて佐和子の唇に紅を差したのも吾妻徳穂だった。有吉佐和子が、生前よく訪れたという自宅近くの杉並区堀之内妙法寺境内には、「有吉佐和子之碑」が建つ。発起人は、「竹本越路大夫、杉村春

子、山田五十鈴、吾妻徳穂」である。碑は、有吉佐和子一周忌を前に建立された。

有吉佐和子文学の原点は、歌舞伎・舞踊等を巡る芸能の世界にあり、その本質を押さえるためには、埋没したそれらの資料を丹念に発掘し、公表する作業を継続しなければならないと思う。「有吉佐和子」に関する文献は、すでに歴史的な共有財産として、検証されなければならない次元に至っているからである。

【付記】ここに紹介した資料は、掲載紙誌の複写を基に忠実に再現しました。但し、ごく僅かながら、明らかな誤字・脱字は修正し、また今日にあつて、意味の難解な表現等には()内に注記、または説明を加えました。此度、本稿を成すに当たり、有吉佐和子令嬢玉青様から全面的な御協力と御教示を賜ることが出来ました。特記して、謝意に代えさせていただきます。

(はんだ よしなが・皇學館大学名誉教授)